黒部峡谷下ノ廊下山行報告（平成 28 年 10 月 16 日（日）－18 日（火））

「下ノ廊下」は黒部川の黒四ダムから下流の仙人ダム付近までを言う。谷沿いの険しい道が続き、雪の消える秋の 2 か月くらいのみ通行可能となる。鋭く切り立った黒部峡谷の断崖を「コ」の字形にくり抜いて作られた道であり、幅は狭いところで 70 から 80 cm ほどの厳しい道ではあるが、渓谷美と紅葉には定評がある。さらに仙人ダムの少し下流には「阿曽原温泉」があり、秘湯中の秘湯として人気がある。阿曽原温泉からは、「水平道」というこれまた谷沿いの険しい道を歩いて交通機関のある欅平に着く。行きたくてもなかなかいけないコースだが、小澤さんにお誘いを受けたのを幸い連れて行ってもらうことにした。

16 日（日）7 時 30 分新宿発のあずさ 3 号で小澤さんと合流した。今日は憎らしいくらい良い天気で、松本を過ぎると常念岳がよく見えている。なぜ憎らしいかというと、今日は移動日だから天気が悪くてもかまわないのだが、峡谷の核心部を歩く最も大事な明日が雨の予報となっているからなのだ。11 時 02 分信濃大町に着くと、相変わらず快晴で青空の下には白馬岳まで見えている。多少早いが昼食を取ろうと思って駅前を探すが、飲食店の数は少ない。それでも駅前食堂を見つけ、明日に備えて生姜焼き定食で栄養を付けた。

12 時 25 分信濃大町発のバスに乗る人は少ないし、登山者はほとんどいない。13 時 05 分扇町に着き、トロリーバス乗り場の待合室に行くとけっこう観光客が多い。13 時 30 分扇町発トロリーバスで破砕帯などを超えて、46 分に黒部ダムに着いた。明日ダムの下に降りるのに早朝だとルートが違うらしいので、係員に教えてもらって確認した。その後ダムに出ると湖面と周りの山が美しい。高度感のたっぷりあるダムだが、放水は残念ながら昨日までであった。ダムを渡り湖岸を歩いて船着き場を過ぎ、14 時 30 分「ロッジくろよん」に着いた。道の両側や小屋の周囲の広葉樹林は、多少時期は早いが紅葉がきれいである。

ロッジの前に 7 人のグループがたむろしていたが、これはチェックインが 15 時からとなっているためらしい。我々も 15 時まで小屋の前で待って受付をし、部屋に入るとなんと 8 畳くらいの個室であった。混雑時には相部屋となるが、明日は平日でおまけに雨との予報なので宿泊者が少なかったらしい。それでも 18 時からの夕食にはテント泊も含めて 30 人くらい集まった。夕食後全員に弁当が渡されたのは、この小屋に泊まるほとんどの人が下の廊下にいくため早出をする。このため強制的に（？）朝食は弁当になってしまう。この小屋は風呂もあるしトイレも水洗で、国民宿舎のような感じだが、のんびりしたい人は泊まらないということなのだろうか。食後もテレビの天気予報をにらんでいたが、変わる訳もない。それでも雨量は大したことは無く、昼頃から止むようなので決行することにした。先ほどの 7 人組は「これじゃいけないから中止にしよう」と言っていたが、70 歳代と思われるグループなので、晴れていても心配である。21 時ころ寝るが雨が降って来た。

17 日（月）朝 4 時ごろ起床、残念ながらやはり雨である。弁当の朝食を部屋で食べ、明るくなるのを待って、5 時 45 分ヘルメットに雨具の完全装備で出発した。小屋の先にある

テント場を通ると、4 張りのテントがそのまま残っている。テント泊組はとっくに出発していると思ったが意外と軟弱である。小雨の中ダムを渡りトロリーバス乗り場のトンネルから先に進む。ひんやりとしたトンネルの出口には登山者用にきれいなトイレが有った。トンネルから黒部川の谷底まで急斜面をひたすら降りるが、道ははっきりしている。ちなみに、標識には「旧日電歩道」となっているのは、関西電力の前身である「日本電力」が水力発電のダム建設に備えた調査のため開削したからだそうだ。

6 時 30 分河原に降り立ち、木の橋を渡って左岸へ行くと黒四ダムが大きくそびえていた。この後はひたすら黒部川の左岸に沿って下り続けることになる。雨は大したことは無いし、視界も悪くはない。もともと紅葉には少し早い時期であり、おまけに暖かい日が続いたので今年は色付きが良くないらしい。それでも切り立った峡谷の両側はそれなりに黄色くなっている。8 時に着いた内蔵助沢出会までは川沿いであったが、徐々に登山道が高くなっていく。というか、登山道はほぼ水平なのだが川が徐々に低くなるので結果としてこうなる。

10 時 20 分に着いた別山谷出合あたりから厳しい道となってきた。黒部の岩壁を削って道を無理やり作っているのだが、それでも無理な場所は木の梯子で高く登りまた大きく降る。うっかり下を見るとはるか下の激流に吸い込まれそうで足がすくむ。さらに木の桟道もあり、もしワイヤーが切れたら谷底に真っ逆さまである。普通の道とは言っても岩をくりぬいた幅 1m未満の狭い道で、山側には手すりとしてワイヤーが張られているが、谷側には転落防止用の柵などはない。気を付けて歩けば転落の危険は少ないとはいうものの、気を抜くことのできない道が延々と続く。当然すれ違う余地はほとんどないのだが、幸いなことに逆コースを歩く人は少なく、今回も反対から出会ったのは 2 名くらいだった。

11 時 10 分に白竜峡を通過するが、このあたりは特に厳しい道が続く。小澤さんはスイスイ歩いて行くが、こちらはワイヤーにしがみ付きながら歩く。今更だが、私は高所恐怖症で、高所に立つと足がすくんでしまうのだ。それでも引き返すわけにもいかないので、特に危ない場所では小澤さんに足の置き場所を指示してもらい何とか通過した。このあたりは特に渓谷が美しいらしいが恐ろしくて下を見るどころではない。ひたすら足元と左側のワイヤーのみを見て通過したが、激流のドードーという音だけが記憶に残った。

ひたすらワイヤーにしがみ付いたまま歩くので、左手が痛くなってくる。ストックは邪魔なのだが、沢を渡渉するのには不可欠である。黒部川は南北に流れているが、これに東西から無数の沢が流れ込んでいる。大きな沢には橋もあるが、渡渉せざるを得ない中小の沢が沢山ある。さらに、垂直な岸壁からは無数の滝が落ちており、道の真上から水が落ちてくる。雨は小やみになったが、レインコートを着ていたので、結果的にはこれらの滝を通るときに濡れなくて済んだ。対岸を見ると（上を見る分には怖くない）はるか上から白糸の滝のように多くの滝が紅葉の間を流れ落ちていて、北海道の層雲峡を 100 個集めたくらいの景観である。岩壁をくりぬいた道は高さもあまりなく、しょっちゅう頭をぶつけるが、ヘルメットがあるのでそれ程痛くはない。転落したらヘルメットがあってもおそらく助からないだろうが、頭にたんこぶを作らなくて済んだのはヘルメットのおかげである。

厳しい道を歩いて 12 時 20 分に十字峡に到着した。ここは東西から大きな沢が黒部川に流れ込んで十字形を作っておりこの名がある。剣沢にかかる吊橋を渡って少し先に行くと、断崖の傾斜がやや緩くなってきた。時間的にも半分を過ぎたので、やや心にゆとりができ一休みする。これからは楽な道かと思ったら甘かった。道は再び岩壁をくりぬいた細い道となり、道はより高さを増していく。50mから落ちても 100mから落ちても助からないのは同じだが、やはり高い方がより怖い。それでも徐々に高さに慣れてきたのか、13 時 30 分ごろ半月峡やＳ字峡を過ぎるときには、怖いもの見たさで下を見る余裕も出てきた。

ここまで私の高度計は壊れたのではないかと思わせるほど一定の高度（ほぼ 1,000m）を保っていたが、対岸の岩壁に不思議な形の洞窟が 2 つ現れた。これが関西電力の送電口で、電線がこちら側に延びて鉄塔が立っている。この鉄塔から突然道が川面めがけて急降下していき、14 時 15 分東谷吊橋を渡ることになった。この吊橋はとても長く、吊橋なので足元もスケスケだし、両側もワイヤーのみで見晴らしが良すぎる。私は絶対下を見ないで前だけ見て渡り切ったが、小澤さんの証言ではかなりの高度感があったそうだ。

吊橋を渡り一休みして車道や半トンネルを過ぎると、14 時 40 分に仙人ダムに着いた。登山道はそのままダムの事務所の中に入り、迷路のようなトンネルを通って外に出る。もう少しで阿曽原温泉だと思ったら、山越えの登りとなった。ここまでほとんど水平の道で今回唯一の登りではあるが、すでに疲れ切っており最後の登りは辛かった。登り切ったと思ったら、こんどは水平な道がどこまでも続く。「この道でいいんでしょうか？」と小澤さんに聞いた頃、やっと阿曽原温泉への標識が現れた。はるか下の河原からは湯気が立っており、急な道を下って 15 時 55 分、やっと阿曽原温泉小屋に着いた。

小屋はプレハブ作りで、冬場は解体してしまうそうだ。部屋は 12 畳の部屋に 8 人でゆったりしているが、前日は 1 畳に 2 人くらいと混雑したらしい。まずは乾燥室で濡れた着物を乾かすが、小さな石油ストーブが 1 台あるだけで隙間風も強く、どこまで乾くか心もとない。ともかくも落ち着いたのでＣＣレモンとコーラで乾杯した、お疲れ様でした。その後入浴しようとすると、小澤さんは入らなくてもいいかな、などと罰当たりなことを言う。確かに風呂に入るには小屋から 10 分くらい急な道を下らなければならないし、おまけにまたも雨が降って来たので、面倒と言えば面倒である。それでも有名な温泉だし、二度と来られないかもしれないから入らにゃ損ですよ、と強くお誘いした。

この温泉は浴槽が一つしかなく露天なので、1 時間ごとに男女入れ替えで、夜は混浴になる。17 時の男の番を待って大勢が谷底の温泉目ざして降りていく。小屋の傘とサンダルを借りて行ったが、けっこう急傾斜なので転ばないように気を付けなければならない。10 人以上が一斉に行ったので入れるか心配だったが、浴槽は十分広く入ることができる。ただ、脱衣場は無く、浴槽の周りに簀の子があるだけなのだが、雨では着物が濡れてしまう。近くにトンネルがあり、出口にシートが架けてあって、雨のときの臨時脱衣場になっている。中に入ると高熱の蒸気が出ているのは、かの有名な「高熱隧道」の影響だそうだ。木製の湯船につかってホッとする。今日は冷や汗をたっぷりかいたし、1 日中雨具を着ていたので、

ゴアといえども汗をかいた。露天風呂なので見晴らしは良いが、この時間になるとすでに薄暗いし、雨のおかげで霞んでもいる。明日も歩くので疲れを少しでも取ろうと、ふだんよりゆっくり入浴した後、ヘッドランプを頼りの小屋までの登りは結構つらかった。

18 時からは夕食となり、食堂には 30 人くらい集まったが、大多数は中高年である。ほとんどの人が黒四ダムから来たと思われるが、皆さん無事に来られてよかった。隣に座った若い女性の 2 人連れは、この温泉に入るためだけに今日欅平から来て明日帰るそうである。私は何も言わずに小澤さんを見て、少しだけ胸をそらしたのであった。今日の夕食は（いつもかな？）カレーで、お代わり自由だというが、我々はちょうどよかったのでお代わりしなかった。隣の女性たちはお代わりしようとするが、「お代わりしないんですか？私たちが大食いみたいで恥ずかしいから、お代わりしてくださいよ」と責め立てる。三浦さんなら無理にでもお代わりしたのだろうが、我々は遠慮した。その後部屋に戻り、まだ寝てはいけないと思いつつ、疲れには勝てずに 19 時には寝てしまった。

18 日（火）、5 時ごろには同室の人がうるさいので起きてしまう。夜中に雨の音を聞いたような気がしたが、外を見ると青空が見えている。乾燥室に行き昨日の濡れたものを回収すると、想像通り生乾きのものが多かった。6 時から朝食を取り 6 時 40 分に出発した。

少し下のテント場の先に行くと、水平歩道への道が始まる。といっても最初は水平ではなく、昨日と同じく 1,000mくらいまで樹林帯を登らなければならない。朝から一上りするとまたも水平な道が続く。最初はそれ程でもなかったが、徐々に山が急峻になってきた。黒部川ははるか下を流れており、昨日よりもずっと高度感はある。怖さが昨日ほどではないのは、高さに慣れてしまったのかもしれない。それでも岩壁をくり抜いてどこまでも続く水平な道は、落ちたら最後という点では昨日以上である。

8 時 30 分、オリオ谷という大きな沢が流れ込んでいるところに来た。ここをどのようにわたるかというと、何と砂防堤内にトンネルがあってここを通ることになっている。時期によってはトンネル内が水浸しのこともあるそうだが、今日は問題なかった。この先はまたも断崖絶壁となり大太鼓という大岩壁をくり抜いて作った細い道を 9 時 20 分ごろ通過する。このころになると、ワイヤーを掴んで歩くのも疲れて、小澤さんに追いつくのが遅くなってきた。小澤さんは余裕で、狭い道でもすいすい進んでいく。

9 時 40 分に志合谷トンネルに着いた。このトンネルは水平道の名物で、志合谷という沢の真下に 150mのトンネルを掘って通過することになっている。素掘りだそうで狭いし、曲がりくねっているので真っ暗である。かねて用意のヘッドランプを出して恐る恐る入っていくと足元には水が溜まっている。ここもひどい時には靴が水没するくらい水位があるらしいが、幸い大したことは無かった。とはいえ、通過するのに 10 分くらいかかった。

この後もひたすら急峻な崖に作られたひたすら水平で狭い道を歩く。もちろん緊張感が無くなるとヤバいのだが、それでもマンネリ感は否めない。かなり遠くに欅平らしき建物群が見え出し、汽笛らしきものも聞こえてきた。11 時 20 分に送電線の鉄塔下に着き、ようやく水平な道から解放されて一休みした。ここからは下りの道となり、45 分にパノラマ台

分岐を過ぎてひたすら下る。膝に自信がないので、ここからは私が先頭にしてもらいゆっくりと降りて、12 時 20 分に欅平に着いた。黒四ダムから 30ｋｍの道を、1 泊 2 日で踏破。高低差は少なかったが、ほとんどが断崖絶壁という道、本当にお疲れ様でした。無事の到着を祝って一人ＣＣレモンで祝杯を挙げた。

欅平は、ご存じトロッコ列車の終着駅なので観光客であふれている。今までの静けさから、一気に繁華街に来たようで落ち着かなかった。駅のトイレで着替えて、12 時 49 分発の列車に乗った。このとき、名物なのでオープン型の客車に乗ったのが間違いであった。最初は気持ち良い風に吹かれて周りも景色が見えるので喜んでいた。ところがトンネルに入ると超冷たい空気が吹いてくるし、おまけにトンネルが長くて多い。さらに悪いことに雨まで降って来た。私は手持ちの服を全部着込んだので寒くはなかったが、隣で小澤さんは震えていた。雨に煙る黒部峡谷も乙なものではないかと思いたいが、紅葉にはやや早いし景色も見えないので、早く着かないかなとそれだけを願っていた。

1 時間以上かけて 14 時 06 分宇奈月に着くころにはかなり強い雨が降っており、少し離れた富山電鉄の駅に行くまでに濡れてしまった。14 時 22 分発の電車に乗り 14 時 44 分に「新黒部駅」に着いた。接続する北陸新幹線「黒部宇奈月温泉駅」で何かおいしいものでも食べようと思っていたが、野中の駅で周りには何もなく、駅の中にも売店くらいしかなかった。この駅は新幹線と言ってもローカル駅なので各駅停車しか停まらず、1 時間に 1 本くらいしか通らない。15 時 26 分発の座席は確保できたが、車両が別々にしか取れなかったので乗車時に解散とした。駅でお土産と駅弁を買って乗り込み、17：52　東京に着いた。

今回は秘境中の秘境で、一般ルートとしては最難関ともいえる「下の廊下」を無事歩くことができて、大感激であった。お天気はイマイチであったが、おかげで小屋は空いていたし、肝心なところではそれなりに晴れていたので、贅沢を行ったら罰が当たる。高低差は少ないもののかなり厳しい道が続いたので、心身ともに疲れるコースであった。100m以上の断崖絶壁を、ワイヤーを頼りに狭い道を歩くのは、高所恐怖症の私にとっては試練であったが、冷静に振り返れば、高所恐怖症でなければそれほど危険なコースではないかもしれない。小澤さんのお誘いと、助けが無かったらとても実行できなかったと思うと、感謝に堪えない。いずれにしても大満足、最高の山行であった。

（伊藤）

黒部峡谷の秋

阿曽原小屋

落ちたら最後

黒部峡谷